

所在地：東京都葛飾区

選定年月日：平成30年2月13日

面積：131.2 ha

選定基準：二(一)(五)(七))

(1) 概要

柴又は、東京低地の東端、江戸川の右岸に位置します。古くから微高地上で暮らしが営まれ、古代には、農村としての性格を強めたとされ、また近世初頭まで下総国に属したため、下総国府などに向かう渡河地点として街道が発達しました。

近世になると柴又は、米作りや江戸に向けた野菜の生産が行われました。近世末には水田を広げるため、微高地裾部で柴又用水が開削され、大正期から昭和初期には耕地整理が行われました。震災・戦災を経た東京の市街地拡大に伴い、高度経済成長期以降は農地の宅地化が進み、大正期には金町浄水場が開設されました。

帝釈天題経寺は、近世初期に微高地中央部に開かれました。18世紀後半の板本尊の発見などを機に、江戸からの参詣客が急増しました。近代以降は鉄道網の整備により、柴又は東京近郊の風光明媚な行楽地となりました。参道には、農家が参詣客を相手に副業的に出した店が常設化し、昭和初期までには現在に通じる賑わいが形成されました。参道に面して対面販売・家族経営を基本とする店を構え、奥に工場と住まいを備えた敷地が連なります。このような暮らしや社寺を核とした信仰などにより、地域での紐帯が維持されています。

このような歴史に根差した特徴を残す葛飾柴又の文化的景観は、東京低地東端において渡河地点であった古くからの農村が、江戸東京近郊として発展する中で、その文化と地域の紐帯を活かしながら、近世以降に信仰と行楽の地として発展し続けてきたことを伝え、貴重です。



帝釈天と親しまれる経栄山題経寺。
時代を通じて境内の整備が行われ、
彫刻や庭園が境内を飾る



帝釈天題経寺の参道。
近代に江戸川対岸から移築されたとされる店舗も残る

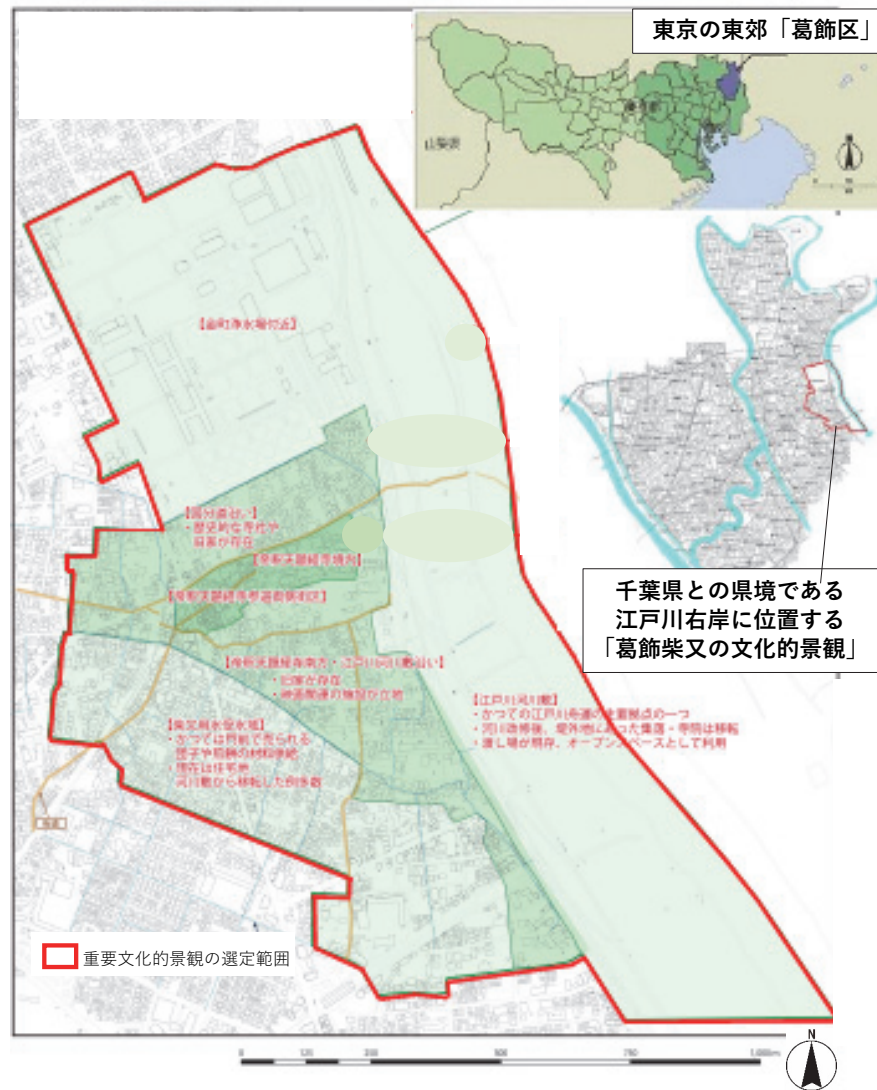


矢切の渡し。硬い岩盤から成る浅瀬であることから
古くから重要な渡河地点であった



柴又に古くから屋敷を構える旧家。
微高地上に多くが分布し、農業を営む家も見られる

(2) 選定範囲



- 重要な構成要素：83件

（３）選定による効果

地域の人々が愛し、地域の人々の手によって大切に受け継がれてきた生業や伝統行事、まちなみの歴史的・文化的価値が調査によって明らかとなり、国の文化財として後世に伝えていくべき景観として客観的な評価がされたこの過程は、柴又の人々のシビックプライド醸成の機会となりました。一般社団法人葛飾区観光協会や柴又神明会、柴又自治会などの地元団体と葛飾区が実行委員会を組織し、帝釈天題経寺や鎮守の八幡神社を会場とするオール柴又のイベント開催へと繋がり、選定が地域のコミュニケーションツールとして機能した画期的な取り組みを生み出しました。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大時には、観光産業や飲食業が深刻な影響を受ける中であっても、文化的景観を守るべく官民を挙げた取り組みによりこれを乗り越えてきました。



選定1周年の記念イベント
帝釈天題経寺のプロジェクトマッピング

(4) 保存計画などの基礎情報

- ・ 葛飾柴又の文化的景観保存計画（平成30年3月改訂版、葛飾区教育委員会）
- ・ 国選定重要文化的景観 葛飾柴又の文化的景観整備計画（令和4年3月、葛飾区教育委員会）
- ・ ホームページ

<https://www.museum.city.katsushika.lg.jp/bunkazai/shibamata/>

(5) 活用事例

事例13-01 ①

ピンチをチャンスに！ コロナ禍における新たな文化観光「葛飾柴又AR謎解きラリー」

●住民と行政の協働による取り組み

令和2年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けた柴又の観光回復は、「葛飾柴又の文化的景観」を象徴する帝釈天題経寺門前の景観を守り、また、大切な要素である参道の食文化を支えていくための喫緊の課題となりました。こうした中、一般社団法人葛飾区観光協会や柴又神明会、柴又自治会等と葛飾区が実行委員会を組織して、観光客が安心して訪れ楽しんでいただけるAR（拡張現実）を活用したイベントを企画し開催することとなりました。

スマートフォンを片手に文化的景観エリア内の8つのチェックポイント（重要な構成要素）を巡り、各所で謎を解きながらゴールを目指します。いつでも・誰でも・のんびりと、いわゆる「3密」を回避しながら、安全安心に柴又散策を楽しんでいただくイベントは、ARを通して柴又の歴史や文化を学ぶとともに、エリア内の回遊促進の効果をも生み、葛飾柴又の奥深い魅力や価値に楽しみながら触れて頂く新たな柴又観光の提案となりました。

参加者の状況（令和5年1月18日～2月28日）

スマホに慣れた若い世代だけでなく、高齢の方や小さなお子さんを連れたご家族など、幅広い年齢層の方に参加頂きました。

＜参加者の年齢構成＞ 18-24歳(8.0%)・25-34歳(26.9%)・35-44歳(36.6%)・45-54歳(19.8%)・55-64歳(6.3%)・65歳以上(2.4%)



幅広い年齢層に楽しんで頂きたい思いを込めて作成した令和4年度イベントポスター



リアルとバーチャルで帝釈天題経寺参道の歴史と文化を紹介



ARのエンディング動画で文化的景観の保存を啓発



スマートフォンを片手にチェックポイント（重要な構成要素）を巡る参加者



① 地域内での魅力の共有

② 活性化の共有

③ 地域外への広報

④ 魅力を引き出す

⑤ 財源の確保と運用

⑥ 人づくり

（５）活用事例

事例13-01 ②

地域住民と行政との協働による葛飾区最大のイベント「葛飾納涼花火大会」

●住民と行政の協働による取り組み

江戸の昔より、陸路と水運とが交わる結節点として葛飾柴又の歴史と文化を育み、人々の交流の場となり、また、のどかな風景が大都市の江戸や東京の人々の日常のストレスから癒しを求めて訪れる場にもなった江戸川。今も野球やサッカー、ジョギングに汗を流し、散策を楽しむ人々が行き交う穏やかな時間が流れる江戸川河川敷は、毎年7月、70万人もの人々を魅了する葛飾納涼花火大会の会場となります。昭和20年代後半に柴又の自治会を中心に地元の有志が集まって打ち上げたのが始まりといわれる花火大会は、現在では、一般社団法人葛飾区観光協会や柴又自治会などと葛飾区が「葛飾納涼花火大会実行委員会」を組織して実施する一大イベントとなりました。観客席と打ち上げ場所が近いため都内屈指の迫力ある花火が楽しめ、江戸川の水面や帝釈天題経寺の藁を照らす風情溢れる花火は柴又の人々の誇りとなっています。

葛飾区内外から多くの方が訪れるこの機会を活用して、実行委員会が作成するパンフレットに「葛飾柴又の文化的景観」の頁を設け、また、令和5年の花火大会では、7つのステージで構成する花火プログラムのひとつを「葛飾柴又 文化的景観を彩る花火芸術」と題して、花火の美しさとともに「葛飾柴又の文化的景観」を紹介し、その魅力や価値、保存に向けた意識の醸成を図りました。



普段は矢切の渡しを漕ぐ音と鳥のさえずりが心地良い江戸川の風景



渡河地点となった「がらめきの瀬」



花火大会のパンフレットで文化的景観を紹介



葛飾柴又の歴史と文化を育んだ江戸川の夜空を彩る美しい花火

① 地域内での
魅力の共有

② 活性化の
目標の共有

③ 地域外への
広報

④ 魅力を引き
出す開発

⑤ 財源の
確保と運用

⑥ 人づくり
・